

みみタロウ

日本語版

90号 2011年10月

滋賀県国際協会ボランティアグループ「みみタロウ」

大津市におの浜1-1-20 ピアザ淡海2F

Tel/Fax : 077-523-5646

E-mail : mimitaro@s-i-a.or.jp

URL : http://www.s-i-a.or.jp

弓の道に導かれ

今回みみタロウは、県立武道館で弓道の稽古をされている神利アレサンドロさん(栗東市)を訪ね、奥様の奈津子さんと共に、弓道を通して得られた人生観などについてお話をうかがいました。



イタリアのローマから日本に来て6年。グラフィックデザイナーをしています。

6歳から空手をやっていた僕は、中学の頃から武道の背景に

ある道教や禅の思想について関心を持つようになりました。そして20歳の時、同じように武道の一つである弓道に出会い、以来、14年間続けています。茶道や花道、柔道などあらゆる「道」は、礼節や自分を律する精神性の修練を意味します。僕が弓道に惹かれたのは、弓道は自分一人で行う技で、結果について決して言い訳ができない厳しさがあるから。しかも技は一つだけ。初心者も上級者も同じ技に取り組めます。技を集中して繰り返し稽古するうちに、いつの間にか自分の心の中にも、技にも変化が現れる。前を見れば同じ道が続いているけれど、振り向けば、いつしか道ができています。

1979年、日本文化交流会がローマで弓道を披露したのが縁で、「ローマ弓道会」が設立され、時々日本弓道連盟から指導者が訪問するなどの交流が続いています。僕は大学卒業後も、仕事の傍ら弓道を続けていたのですが、転職時に3ヶ月の時間が取れたのを機会に、弓道への理解を深め、日本文化を知るために、来日して日本語を勉強することにしました。滞在中は京都の日本語学校に通い、イタリアで指導していただいたことのある南井先生のおられる滋賀県の武道館で弓道の練習をしました。そこで、同じく弓道をしていた将来の妻と出会い、日本に住むことになったのです。

来日以来、僕は日本人ばかりの中で暮らしています。イタリア語には「ローマに住むならローマ人のように、その他にありては彼の者の如く生きよ」という格言がありますが、これは4世紀、ミラノの司教がローマに赴く神父に対して言った言葉で、いつの時代にも語り継がれてきた真理。人が異国に住む時、問題となるのはいつも言葉とマナーの違いです。ですから言葉の勉強は絶対必要です。僕も日本語学校で一年間通い、ボランティアの先生にも教えて頂きとても感謝していますが、もっと日本語の勉強をするためにも、滋賀県にも手軽に学べる本格的な日本語学校

があればとてもありがたいと思います。マナーについては、日本人は欧米人と異なり、人にあまり注意をしません。でも、そうだからマナー違反が許されるということではないのです。だから私たちは自ら周囲を観察して日本の社会や文化のあり方を学習する必要があると思っています。違う文化と出会った時、自分の文化が絶対であるといった頑なな態度を通すと、軋轢が生まれます。キリスト教とユダヤ教とイスラム教はそれぞれ自分の正当性を主張して譲らず、千年以上も無益な争いの歴史が続いています。しかし理解すれば人の心はみんな同じ。宗教にしろ文化にしろ人間へのアプローチが異なるだけという視点を持つことで違いを乗り越えることができるのではないのでしょうか。うまく共生するには、異なる部分について、柔らかな心を持って当たることが大切です。僕はカトリック聖職者の多い家系の生まれですが、日本では妻の宗教を尊重し、神道で拳式してとても良かったです。いろんな考え方がありますが、特にこれから日本の社会で生きていく子ども達には、彼らが周りとの文化的葛藤で苦しむことのないよう、あまり頑なに親の文化を押しつけず、やわらかな心と共に日本社会の中で自然体で育てるのが良いと考えています。



南井先生と奈津子さんと共に

心のあり方は誰に教えても与えるものでもありませんが、先人の辿った「道」を歩いていくと、いろんな気づきがあり、観えてくるものが多くなります。例えば、靴の並べ方一つを取っても、以前は何も思わなかった

のが、それに気づくようになると、何故そのようにするのか考え、深い理解に結びつきます。日本の暮らしの中では「心」に気づく場面が多くあります。家と家の微妙な境目や道なども人知れず掃除してくれる人がいて、誰にお礼を言ったらいいのかわかりません。弓道を続けていく中で、様々な心気づき、人生が味わい深いものになっていくようです。

今、五段錬士の審査に向けて、「弓道教本」を勉強中。日本語で筆記試験に臨む予定です。

一弓の道をもう一步！